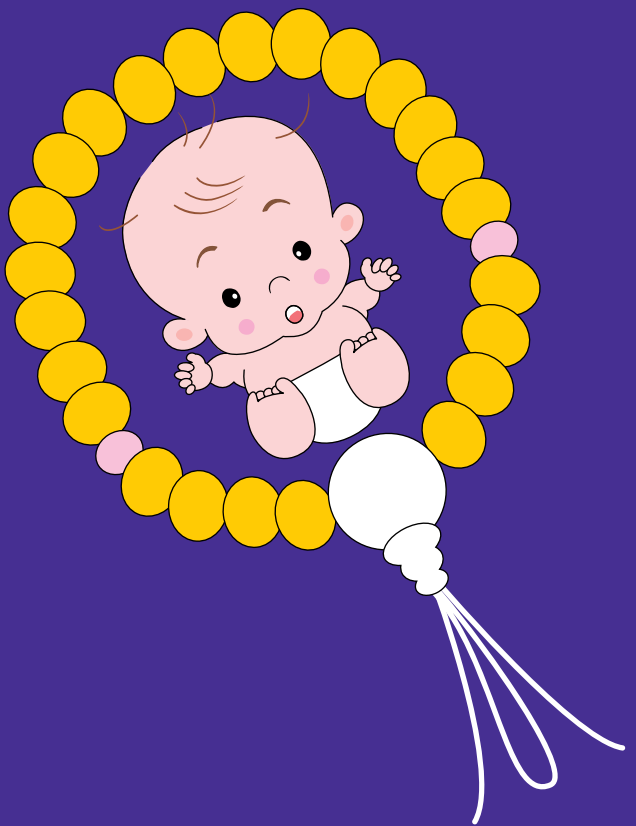




仏事あれこれ小百科



浄土真宗

仏事 あれこれ 小百科

本願寺派安芸教区

門徒必携



仙事あれこれ小百科



仏事あれこれ小百科

目次

第1章 仏壇篇

- ① お仏壇の飾り方…………… 3
- ② お仏壇の意味…………… 5
- ③ お荘厳のころ…………… 7
- ④ 打敷・戸帳・華鬘…………… 9
- ⑤ 鈴と位牌…………… 11
- ⑥ 時絵(まきえ)…………… 13
- ⑦ お灯明…………… 15
- ⑧ お花…………… 17
- ⑨ お香…………… 19

第2章 作法篇

- ⑩ お焼香の作法…………… 21
- ⑪ お供え物…………… 23
- こぼればなし①(お焼香の作法その1)…………… 25
- ⑫ お守りとお札…………… 27
- ⑬ 念珠…………… 29
- ⑭ 式章…………… 31
- ⑮ 日常勤行…………… 33
- ⑯ 『御文章』と『御伝鈔』…………… 35
- ⑰ 迷信…………… 37

こぼればなし②……………39

第3章 仏事篇

⑱ お墓……………41

⑲ 永代経……………43

⑳ 法名・帰敬式……………45

㉑ 初参式……………47

㉒ 諸々の行事……………49

㉓ 降誕会……………51

㉔ お盆……………53

㉕ お彼岸……………55

㉖ 報恩講……………57

㉗ 除夜会・元旦会……………59

⑳ 仏旗(六金色旗)……………61

㉑ まとめ……………63

こぼればなし③……………65

付録(弔電弔辞文例集)……………66

あとがき

本書では、特にご本尊をイラストで表現
することは遠慮させていただきました。



第1章

仏壇篇

お仏壇の飾り方

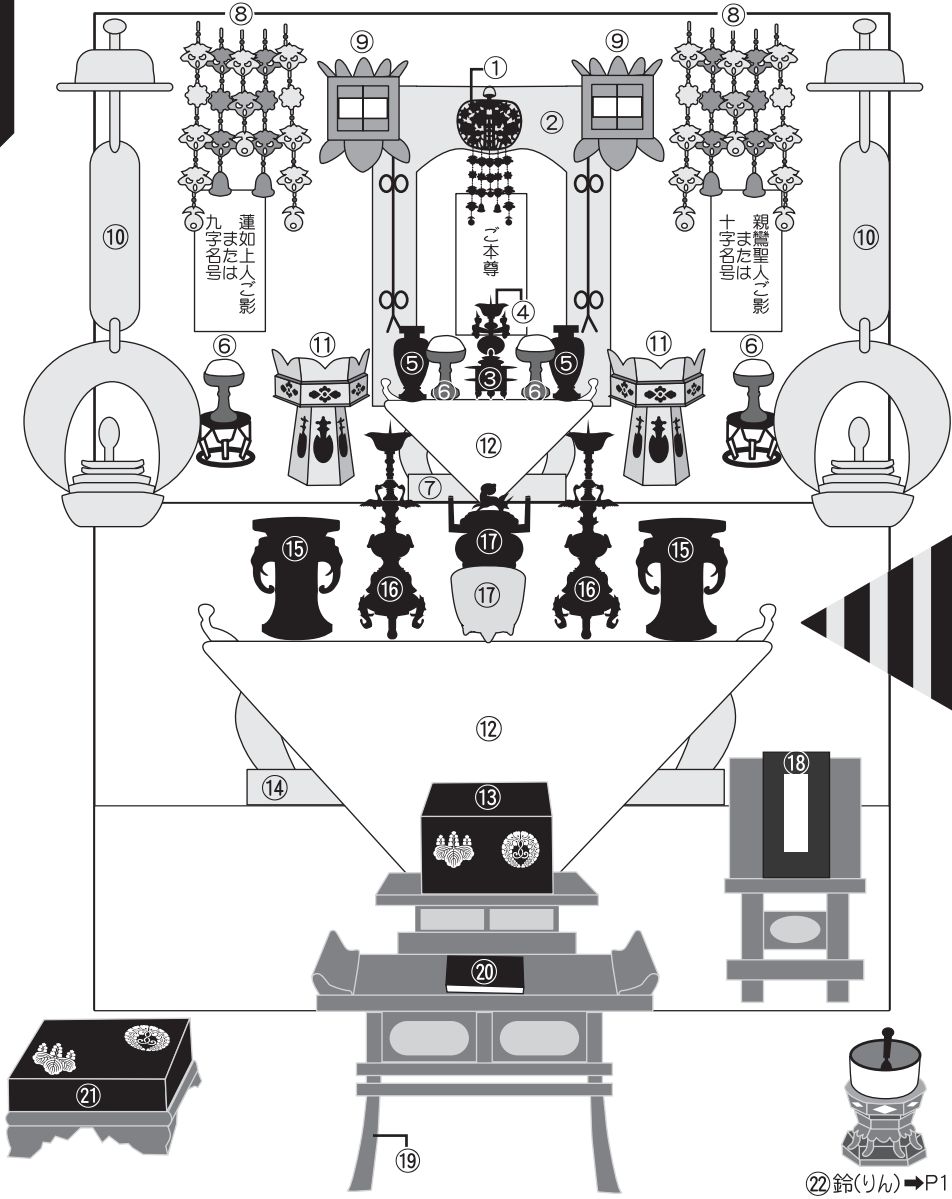
仏事あれこれ ①



1 お仏壇の飾り方

- ①華鬘(けまん)→P9
- ②戸帳(とちよう)→P9
- ③火舎(かしゃ)
- ④ろうそく立
- ⑤花瓶(けびよう)一对
- ⑥仏飯器(ぶつばんぎ)→P23
- ⑦上卓(うわじよく)
- ⑧瓔珞(ようらく)
- ⑨金灯笼(かなどうろう)
- ⑩輪灯(りんとう)
- ⑪供笥(くげ)→P23
- ⑫打敷(うちしき)→P9
- ⑬和讃(わさん)
- ⑭前卓(まえじよく)
- ⑮花瓶(かひん)一对
- ⑯ろうそく立一对
- ⑰香炉(こうろ)
- ⑱過去帳(かこちよう)→P11
- ⑲経卓(きょうじよく)
- ⑳日常勤行聖典(にちじょうきんぎょうせいてん)→P33
- ㉑御文章(ごびんしょう)→P35

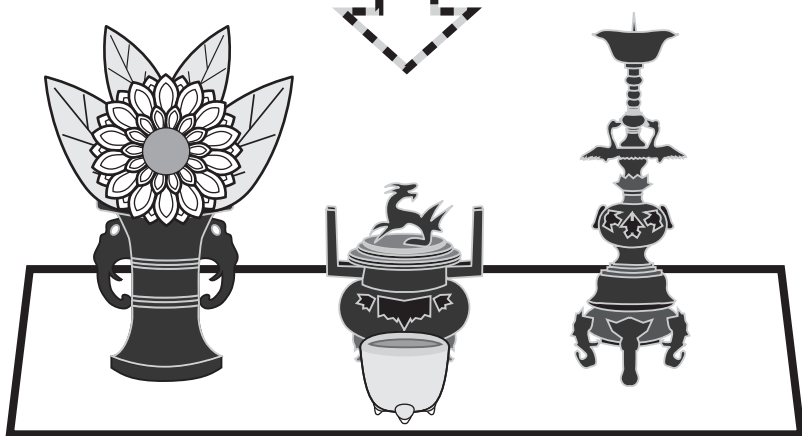
五具足 → P5



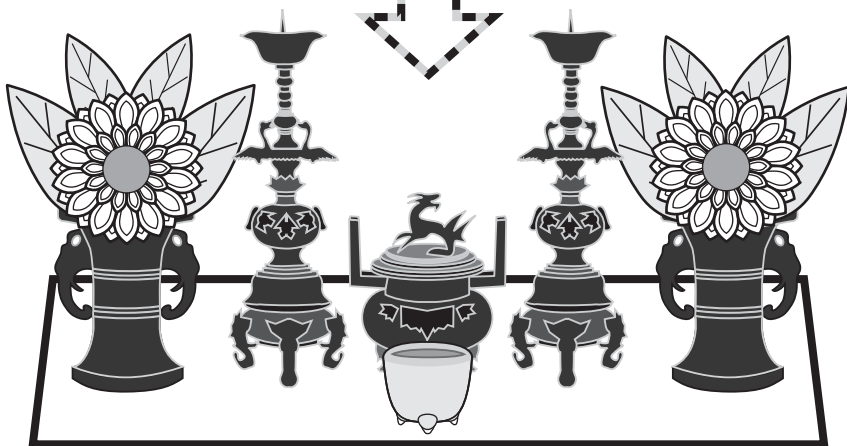
㉒鈴(りん)→P11

お仏壇 の意味

みつくそく かひん こうろ
☆三具足 (花瓶 + 香炉 + ろうそく立)



こくそく かひんいっつい こうろ いっつい
☆五具足 (花瓶一対 + 香炉 + ろうそく立一対)



※香炉は金香炉と土香炉を合わせて一つとみなします。

※普段のお飾りは：三具足で。大事な法要の時は：五具足に。

POINT

- 新居を構えたらまず、お仏壇
- 家族みんながお参りしやすいところにご安置しましょう

お仏壇は家庭の中心です。浄土真宗では、ご本山からお迎えしたご本尊を、講中で一年ごとに交代でお給仕してきた長い歴史があり、一般の家庭にお仏壇が安置され始めたのは、江戸時代後期と考えられます。

「亡くなった者もいないのにお仏壇を迎えるとその家に死人が出る」などという人がありますが、まったくの迷信です。お仏壇のない家には、手を合わせる場所がありません。新居を構えたら、まずご本尊（お仏壇）をお迎えするのが浄土真宗の門徒の心得です。

お仏壇を安置する場所については、「西向きがよい」とか、「一階でその上に天井以外なにもない所がよい」とか色々いわれます。もちろんこだわれば、まずお仏壇の場所を決め、そこから家の設計にとりかかるといいの覚悟が必要でしょう。ところが、実際には敷地、間取りなど、さまざまな制約があ

りとても難しいことです。

そこで考えられるのは、まずみんながお参りしやすい所を選ぶことです。昔は仏間があつて、そこはその家の一番大事な部屋で、客間でもありました。しかし、あまり人の入らない遠い部屋より、なるべくお参りのしやすい、手の合わせやすい所がよいでしょう。

マンションのある家庭にお参りしましたら、台所の食器棚の上にあります。「毎朝子どもが手を合わせていきます」とその家の方がおっしゃっていました。一番お参りしやすくてみんなが集まりやすい所、それが台所ならば、それでもよいのです。それは仏壇とは死者をまつところではなく、家庭生活の根源であり、心よりどこところなるところなのです。

阿弥陀如来さまに合掌礼拝し、お念仏を称えるところに、まことの智慧とあたたかいお慈悲をいただいでいくのです。

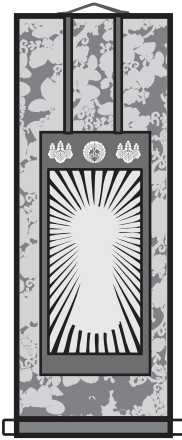
しょうごん

お荘厳 の ところ

お仏壇は
極楽浄土の世界を
あらわすもの。



蓮如上人ご影



ご絵像ご本尊



親鸞聖人ご影

※ご本尊、お脇懸には
2つのパターンがあ
ります。



九字名号



六字名号ご本尊



十字名号

POINT

- お仏壇にはお茶、故人の写真、位牌、お守り
お札などはおきません
- ご本尊、お脇懸は本山からお迎えしましょう

荘厳とは、そもそもおごそかに飾るという意味です。「本願荘厳」という言葉があります。浄土の世界は阿弥陀如来さまのこころ・本願によってあらわしだされ成しあげられたのです。浄土の荘厳は、苦悩する人びとを救うという如来さまのおこころを人びとに知らせるすがたであり、はたらきなのです。

お仏壇は如来さまの浄土がわかりやすくあらわされたものです。お仏壇を荘厳する、お飾りするということは、お浄土のようにおごそかにお飾りするということなのです。

お仏壇の中心は如来さまであるということはいうまでもありません。正面がご本尊の阿弥陀如来さま（「南無阿弥陀仏」のお名号の場合もありません）です。左右にご安置するのは、お脇懸といわきかけい、右脇が「親鸞聖人のご影かげ」（「帰命尽十方無碍光如来」のお名号の場合も）、左脇が「蓮如上人のご影」（「南無不可思議光如来」のお名号の場合も）です。ご本尊もお脇懸も真つすぐにご安置

されていることが大切です。傾いているときはすぐ直します。ご本尊、お脇懸はお寺を通じ、ご本山からお迎えします。

三具足さんぐそく（蠟燭立ろうそくたて、花瓶かひびん、香炉）も正面から見て真つすぐにバランスよくお飾りします。蠟燭立、香炉の足に注意します。三本のうち一本が正面にくるように置きます。

浄土をあらわすお仏壇の中に、お浄土にふさわしくないものは置けません。お茶や故人の写真、位牌、お守り、お札などは置きません。すつきり整ったお仏壇にしたいものです。

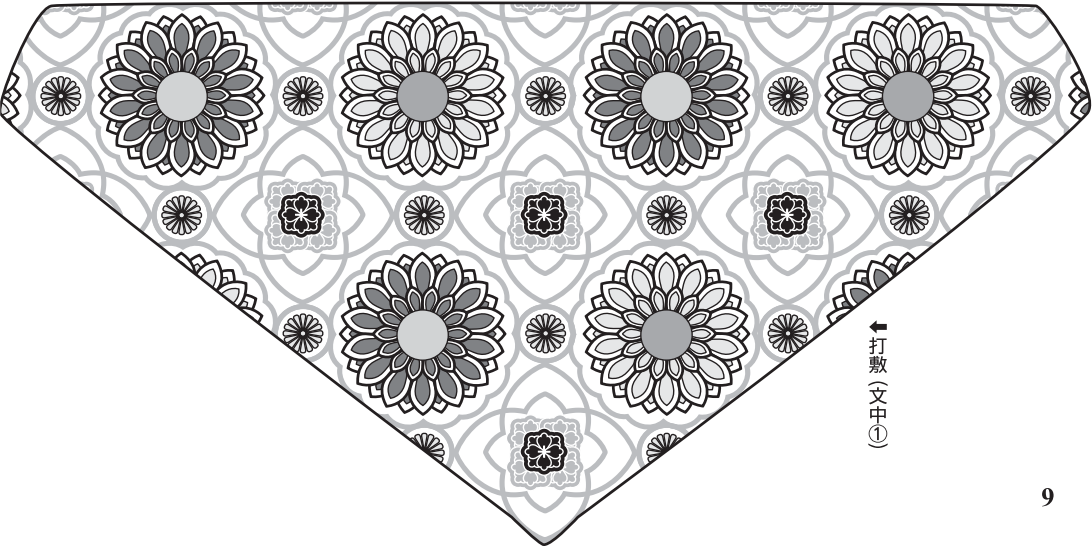
お仏具一つひとつが如来さまのおこころをあらわしていると受けとめ、ホコリがたまったりしないようにきれいにするという心がけが大切です。掃除、お給仕が行き届いたお仏壇をみるとすがすがしい気持ちになります。お荘厳のお心を大切に、お念仏相続するとともに、自分自身の人生もうるわしく荘厳し、生きていきたいものです。

うち しき
打 敷
と ちよう
戸 帳
け まん
華 鬘



←戸帳(文中②)

お寺さんに相談して最適のお荘厳を。



←打敷(文中①)

POINT

● 打敷は季節や行事に応じて
使い分けましょう

お仏壇の正しいお荘厳といっても、報恩講など浄土真宗の大切な仏事のときのお飾りの仕方と平素のお飾りの仕方では変わってきます。また各ご家庭によつてお仏壇の大きさ、形が異なりますから、すべてをそろえることは難しいことです。例えば四具足、上卓などは小型のお仏壇には置くことができない場合もあります。最低限そろえていただきたいお仏具として、お仏飯器、華瓶、供筒、花瓶、蠟燭立、香炉、鈴などがあります。

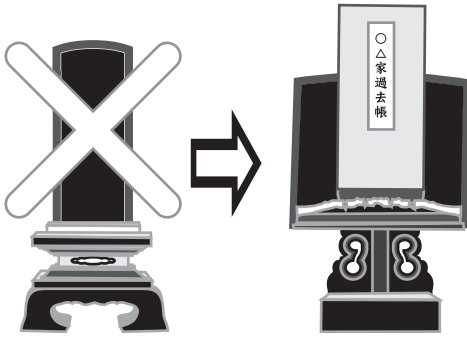
また、基本的なお荘厳の中で、打敷、戸帳、華鬘は必要なお飾りですが、このことについて少し詳しくご説明します。

打敷……報恩講や年回などの法事では、上卓、前卓に、打敷をかけ、仏前をお飾りします。この打敷は、お釈迦さまのご在世時は、釈尊の座所を裝飾したものが後には仏前を裝飾する

仏具となってきたものといわれます。臨終から満中陰までは打敷を裏返して使用するのではなく、銀色か白色の打敷をかけたいものです。なお打敷には冬用と夏用があります。

戸帳……ご本尊を飾る金欄錦などをつくった布で、宮殿正面の二本の柱の間にかけるものです。もとは宮殿の入口の扉として、垂れ下げてあったものが、中のご本尊がいつでも礼拝できるように中央部を切り抜くようになったものです。

華鬘……仏前の戸帳の上部中央にそえる荘厳具で、糸または、真ちゅうからできています。もともと、花輪や花束を贈るように、お釈迦さまにお会いするとき、生花の華鬘（花の首飾り）を身につける行者の装身具として、ご本尊前に飾られるようになったものです。



りん
鈴
と
位牌



POINT

- 鈴は読経の時に
- 位牌は用いず、法名は過去帳に

浄土真宗のお仏具の正しい使い方。毎朝お仏飯をお供えする時や礼拝する時に鈴をたたく人は少なくないと思います。たいていはいけないことはありませんが、本来、本願寺派では、鈴や打物うちものは勤行（お経を読む）時に使うもので（最初の音の高さを示したり、途中の区切り、終わりのとき鳴らすもの）、仏さまや故人に知らせるためのものではありません。お仏壇の中に故人が居るといふ思いからでしょうが、固定的な実体としての靈魂を否定するのが仏教です。

浄土真宗以外のお仏壇には、先祖の位牌いはいが安置されていることも多く、霊が宿る所として拜まれているようです。位牌は中国の儒教で用いられていたものです。それは故人の生存中の官位姓名を書き記した札を置き、そこに霊が宿ると信じられていました。それが日本の先祖崇拜の信仰と結びつき仏教に

転用されたものです。仏典には位牌に関する記述はありません。私たちは阿彌陀如来さまの他力によりお浄土に参らせていただきますので、靈魂が宿るといふことは教えの上からも否定されません。

浄土真宗では位牌を用いず、故人の「法名」は過去帳に書き記しておきます。先立たれた方は阿彌陀如来さま同体の仏さまとして私たちのためにはたらく続けておられるのです。

浄土真宗のお仏壇はお浄土の根本の仏さまである阿彌陀如来さまをご安置するところです。阿彌陀如来さまのお徳・おはたらきに出遇わせていただくのです。



POINT

●あなたのお仏壇の蒔絵には 何が描かれていますか？

お仏壇はご本尊（阿彌陀如来さま）をご安置するところであるとともに、お浄土のすがた（浄土莊嚴）なのです。お仏壇の美しい蒔絵もまた、お浄土をあらわしています。今回はこの蒔絵についてお話いたしましょう。

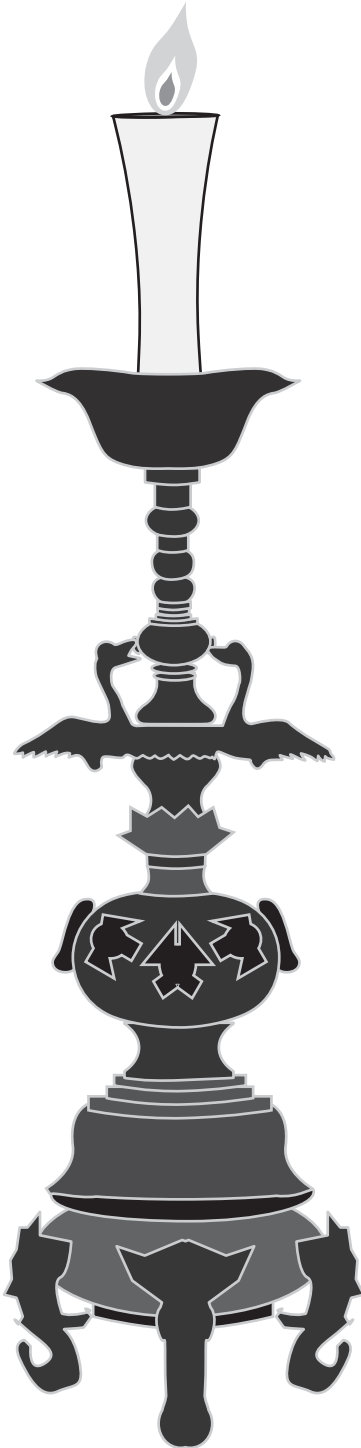
まず、鳥の絵ですが、これは浄土の六鳥といわれ、『仏説阿彌陀経』に説かれています。白鶴、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命之鳥がそれです。これらの鳥は、昼夜六時に美しい声で鳴き、その鳴き声は阿彌陀如来さまの尊い教えを説いています。お浄土の人びとは、その声を聞いて仏・法・僧を念じます。また、これらの鳥は、罪の報いとして生まれ、た鳥ではなく、阿彌陀如来さまが仏法を広めるためにあらわされたものです。

次に花の絵は如来さまの慈悲の象徴です。四季折おりの花はよるこびを倍増し、悲しみは半減してくれます。嬉しいときも悲しいときも、私に寄り添う如来さまのお心をあらわします。また、蓮の花が描かれていることがあります。蓮の花には他の花にみられない素晴らしい特徴があるためです。その一つは、清流の中では咲くことなく、汚泥おどろいの中に咲く花だということです。いかり、はらだち、そねみに満ちた心に咲く仏法の花なのです。また、蓮の花は花が咲いた時にはすでに種を有しているといわれます。法蔵菩薩が阿彌陀如来さまと成仏された時には、すでに凡夫を救いとする種が出来上がっていたことを教えています。

なお、広島で製造される伝統工芸品、広島仏壇には親鸞聖人の故事（枕石、川越の名号など）や、お寺の本堂と同じように向かって右側の扉に聖徳太子、左側の扉に七高僧が描かれているものもあります。

お灯明

とうみょう



お灯明は、
如来さまの
智慧の光明。

POINT

● ろうそくの色を使い分けてみましょう

お仏壇にお参りするときは、お仏壇のお飾りをよく見て、お花、お香、お灯明（ろうそく）などが、約束通りに飾られているかを確認したいものです。その中でも、「お灯明」について大切なことを、説明いたします。

まず、お灯明は、阿弥陀如来さまの智慧を表現しています。このお灯明は、永く深い私の心の間でも一瞬にして破る、阿弥陀如来さまの智慧の光明を意味しているのです。

親鸞聖人の『正像末和讃』に「無明長夜の灯炬なり 智眼くらしとかなしむな 生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ」ともあります。お灯明をあげるときは、ぜひこのご和讃を思い出してほしいものです。

次にお灯明に用いるろうそくの色には白・朱・金・銀とあり、仏事の内容によつて使い分けられています。

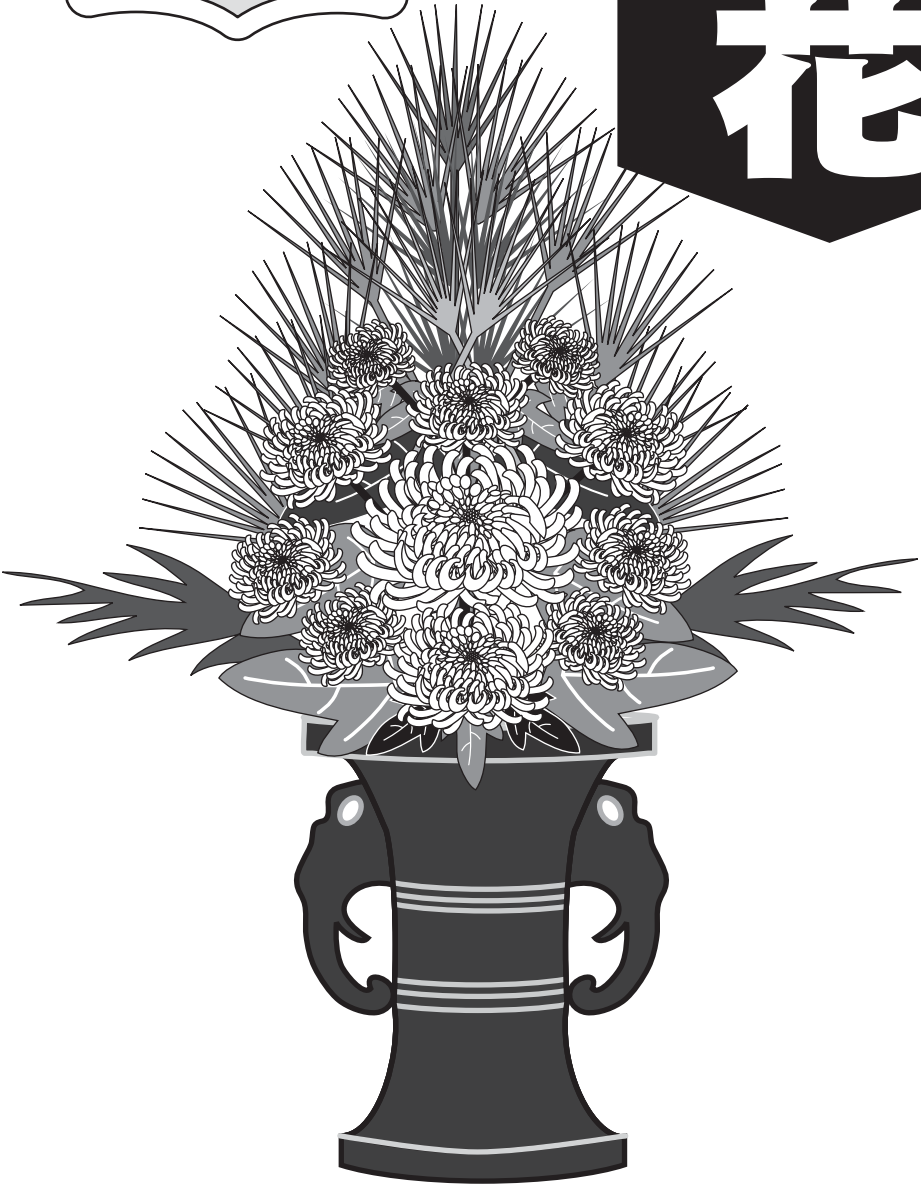
基本的には白で良いのですが、江戸時

代の中頃より色分けして、白ろうそくは一般仏事に、朱ろうそくは報恩講・七回忌以後の法事などに、銀ろうそくは葬儀・中陰・三回忌までの年回などに、金ろうそくは慶びの仏事（結婚式・起工式）などに使い分けれます。ときには、仏事の内容によつて、ろうそくの色を使い分け、お灯明をあげてお参りされてはいいかがでしょうか。きつと、気持ちも違ったものになります。

また、お灯明を電気でつくようにされている場合に、電球が切れていないかを確認しましょう。できれば二、三個余分に買っておきたいものです。また、お灯明はもちろん、電気も、お参りがすんだら必ず消すことを習慣づけましょう。

お浄土のお花を
あらわす仏華。

お花



POINT

- いつも生き生きしたお花を
- トゲ・毒のある花や、造花は避けましょう

仏前にお花などをお供えすることを「**供華**」といいます。仏さまを敬う心、感謝の気持ちからお供えするものです。お供えされた仏華は仏さまのお慈悲をあらわすともいわれます。お花は万人の心を和ませるからでしょう。きれいにお供えしたいものです。

さてお花は、お釈迦さまご在世当時からさまざまな方法でお供えされました。代表的なものに**盛華**や**散華**といった方法がありました。盛華とは籠などに花びらを盛ることで、散華とはつま取った花びらを舞い上げて空中に散らすものです。ちなみに日本では、この散華が、法要儀式などで行なわれる作法として、**華葩**と呼ばれる美しい紙製の花びらを使って行なわれています。

しかし、このたいへん美しい盛華や散華も、この方法だと花はすぐに枯れてしまいます。インドのように年中いるとどりにお花があれば、すぐに次つぎとお供えできますが、日本ではなかなかそうはいきません。

日本では水を入れた花瓶に「お花を立てて」お供えます。「お花を生ける」

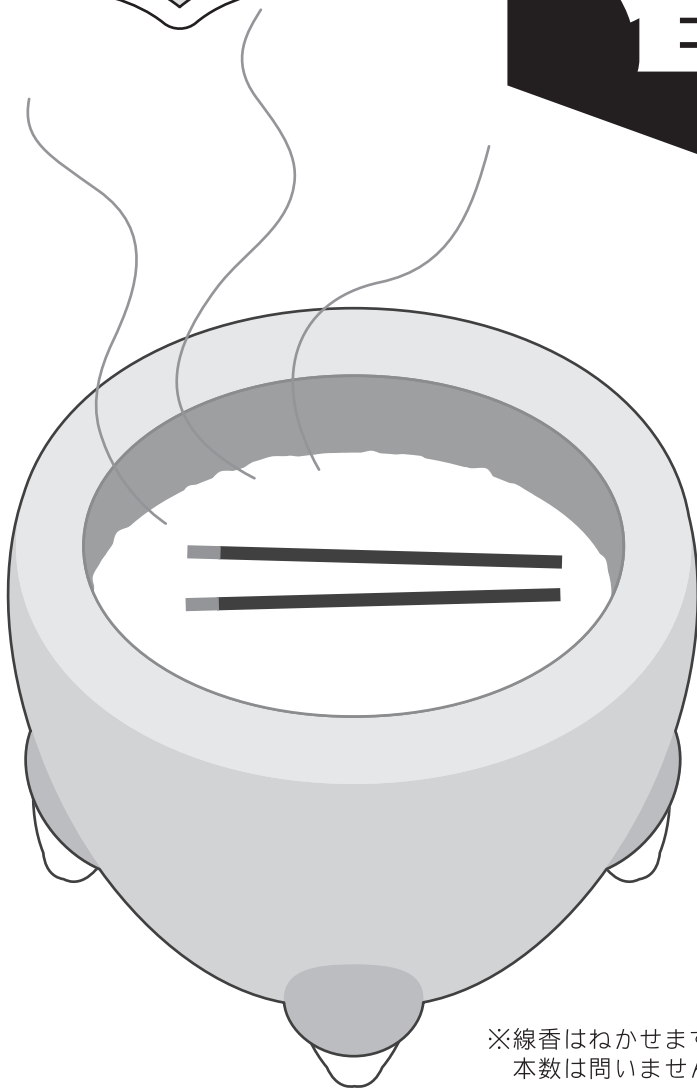
という言葉があるように、この方法は野山に咲く四季折おりのお花や草木を、そのすがたのままご仏前にお供えしようとの心もちから根付いたものなのでしよう。また盛華や散華では、お花を長い間保持することができないということもあつたのでしよう。いずれにしても、仏前にお供えされた四季折おりのお花、そのひとつひとつの精一杯のいのちを通して、阿弥陀如来さまの限りないいのちに気づかせていただきましよう。

お浄土にはたくさんのお花が咲いているとお経に説かれますが、お浄土のすがたをあらわすはずのお仏壇のお花が、枯れつぱなしといった状況がたまに見受けられます。また真ちゅうや紙などの造花を生花の代用としていいることもありませんが、この方法は感心できません。お花は、枯れないうちに新しいお花と差し替え、水の入替えは怠らないよう、毎日のお仏壇のお給仕において大切にしていたきたいものです。

なお、トゲや毒のある花は、お供えないことになっています。

お香は阿弥陀如来さま
の差別のないお慈悲の
お心をあらわすのです。

お香



※線香はねかせます。
本数は問いません。

POINT

● いいお香を使いましょう

わが国では、古くからお香のかおりを聞いて、芳香を味わうたしなみや、何人かで聞香し、お香の種類をあてたりする香道も、今日に伝えられています。

しかし、お香の起源をたずねると、やはりお釈迦さまがお生まれになったインドにいきつくでしょう。お香を体に塗って（塗香）体臭を消したり、お香をたいて部屋のおいを消すために用いられました。いずれにしても、お香のたしなみが、仏教にもとり入れられたようです。

お経の中にも、数えきれぬほど、お香の徳が説かれています。阿弥陀如来さまも四十八願の三十二番目に妙香合成の願をお建てになって、極楽世界は無量の宝と、百千の妙香とでなり、妙香をもって十方世界に薫じ渡らそうと願っておられます。あたりを清らかにし、わたしたちの心身をすがすがしく安らかにしたいと願っておられること

がうかがわれます。

親鸞聖人の「浄土和讃」に、「染香人のその身には、香気あるがごとくなりこれをすなはちなづけてぞ、香光莊嚴とまうすなる」と示されてあるように、お念仏をよるこぶ人には、いつも念仏者らしい雰囲気があります。春の香り夏の香りがあるように、人それぞれにもその人の雰囲気が漂います。価値ではなく、そのものの意味を大切にする人には、ぬくもりのある香りが漂います。その生活は、阿弥陀如来さまの光に包まれた慚愧と感謝にあふれたものです。

すなわち、お香は阿弥陀如来さまの清らかで、誰をも差別することなく遍満しているお慈悲のおこころをあらわす、お莊嚴の代表なのです。そのためには、煙ばかりで目や喉に不快感を与えるようなお香でなく、できるだけ良質のお香を供えたいものです。

お焼香 の作法

他宗の作法や、世の中の
間違った習慣に惑わされ
ず、門徒の正しい作法を
身に付けましょう。



合掌・念仏・礼拝。
(文中④)



尊前で一礼する。
(文中①)



最後の一礼。
(文中⑤)



右手で香を一回つまみ、
香炉にくべる。(文中②③)

(※立ってする焼香は25ページを参照)

POINT

- 焼香はおいしいただかず 1 回
- 線香は立てずにねかせましょう

ご仏前に薫香くんこうをただよわせる伝統的な仏教徒の作法には「焼香」と「燃香ねんこう」があります。香炉に火を埋め、抹香まつこう（粉末状のお香）や沈香しんこう（混もののない純然たる香木）で覆うのが「焼香」です。焼香の作法は次の通りです。

焼香卓（台）の前で一礼（合掌はしない）。

右手で香をつまむ。

おいしいただくことなく、そのまま香炉へくべる（一回だけ）。

阿弥陀如来さまに向かって合掌念仏・

礼拝。

一礼する。

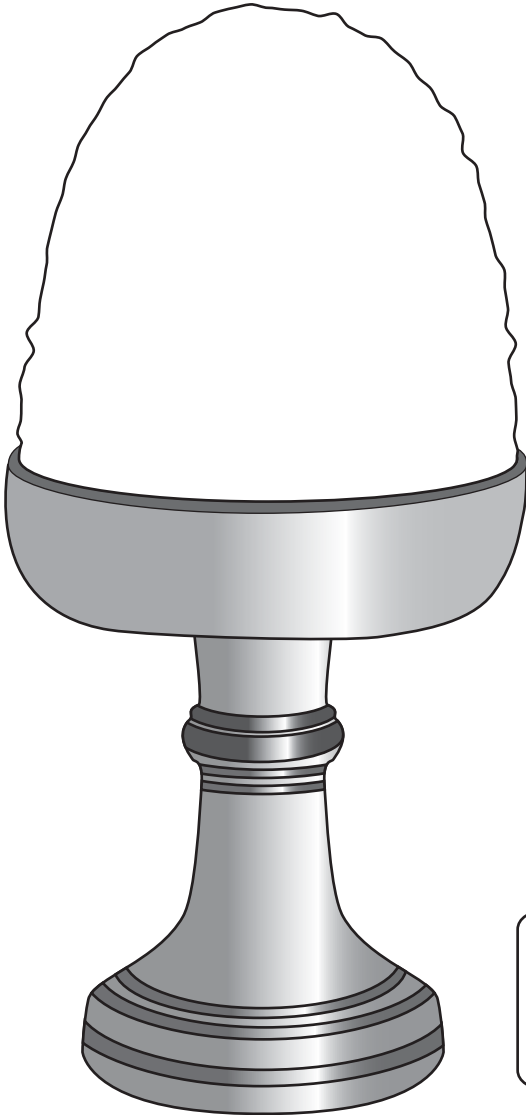
焼香は、香りが短時間で去ってしまいます。そこで、長く香りを保たせるために「燃香」という方法が考えられました。大きな香炉に、抹香を一列か、「ㄱ」の字を交互に組み合せた形で線状にならべ、端に着火して燃焼させます。手間と時間が必要です。

線香が日本に伝えられたのは江戸時代前期といわれています。一六六七年、長崎の五島一官という人が、中国から、抹香をのりで線状に固めた線香を伝え広めたそうです。線香ならば、いちいち抹香をならべることもなく、途中で消えることもないので、燃香に代わり重宝がられたのでしょう。

浄土真宗では、本来の「燃香」に習い、線香はいかなる時（葬儀・お墓など）にも立てません。香炉の大きさに折ってねかせてたく作法がきまりになっています。本数は問いません。防災面からも良いといわれています。

「香炉灰」にも、線香の火が消えやすいもの（金の砂・砂丘の砂など）もありますのでよく吟味します。燃え残りの線香、マッチの軸などは香炉に残さないように。

お供え物



お供えは、
如来さまへの感謝から。

POINT

- お仏飯は必ず
- そして、お餅、お菓子、果物を

先日あるお仏壇にお参りしたら、タバコ、ビール、お酒、調理された食べ物などが供えてありました。「故人にお供えしたい」という心情なのでしょう。しかし、お供え物は、阿弥陀如来さまへの感謝をあらわします。私たちが生きていく上で欠くことのできない大切な物をお供えするのは、阿弥陀如来さまのめぐみを感じしよるこが意味があるのです。

では、どんな物をお供えしたらよいのでしょうか。お供え物の中で、最も大切なものはお仏飯です。ご飯は主食です。できれば毎朝、お供えしましょう。最近は食生活の変化により朝ご飯を炊かない家庭も多くなりました。そんな時は、あえてパンや生米を供える必要はありません。ご飯を炊いた時、お仏飯としてお供えするようにしましょう。お仏飯は専用の器・仏飯器に盛り、お供えします。過去帳などにはお供えし

ません。その際に鈴すずは打ちません。お供えしたお仏飯は、家族でいただきます。しよう。

他のお供え物については、餅、菓子、果物の順にお供えします。法事や報恩講の時など、供笥などの台の上に適量を形よく、落ちないように載せます。できれば同じ物を左右一対にしてお供えした方が、調和がとれてきれいになります。

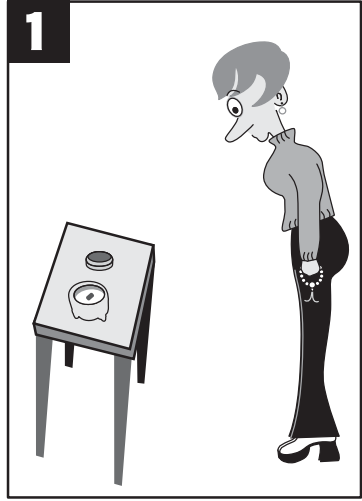
お仏壇の中は狭いので、空いているところへお供えしますが、原則としてはご本尊（阿弥陀如来）さまに近い方より、餅、菓子、果物の順に横にお供えします。無理な場合は上段より下段へお供えします。大切なのは、お供え物でご本尊やお脇懸が隠れたり、基本的な仏具の位置がずれないようにすることです。タバコやビール、お茶などはお供えしません。

こぼればなし(1)

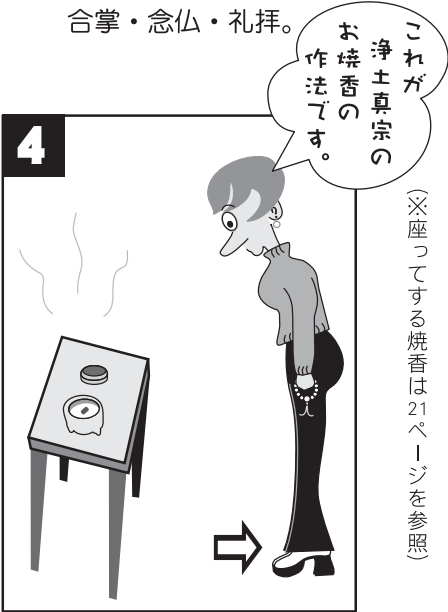
お焼香の作法その2：立ってする場合



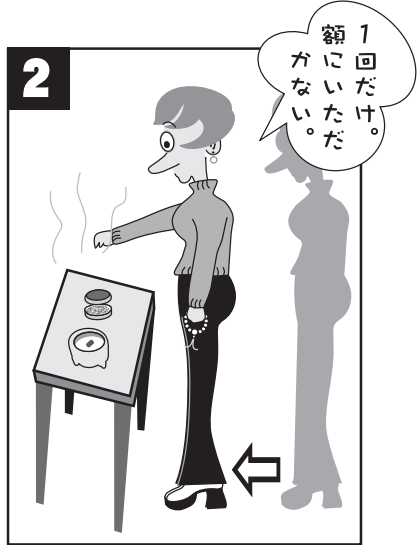
合掌・念仏・礼拝。



尊前で一礼する。



後ろに下がって、最後の一礼。



前に進んで、右手で香を一回つまんで香炉にくべる。

(※座つてする焼香は21ページを参照)

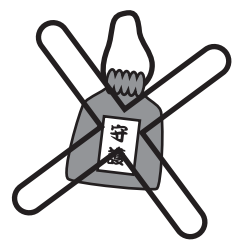
第2章

作法篇

仏教は因果の道理を
わきまえて、苦悩を
超える教えです。

お守り と お札

ふだ



POINT

● お守りもお札も不要です

あなたは親戚や友人知人などからお守りやお札をもらったことはありませんか。それが、意味のないものだとかかっていても、病気や事故に遭わないといわれて、いらぬと断ることができなかつたということはありませんか。もらったお守りやお札を粗末にすることができず、どこに置いたらよいかと迷っていたら、お仏壇しかなかった、そのような思いをしたことはありませんか。

どんなに科学技術が進歩しても事故や災難は起こりうるものです。また、医学が発達しても病気もせず長生きできるというわけでもありません。そのことから避けよう逃れようという気持ちから、お守りやお札をもっていれば安心だと思ひ込むのでしょうか。

仏教は因果の道理をわきまえて、苦悩を超えていくみ教えです。本願に出遇い煩惱具足の自覚に立つたならば、祈

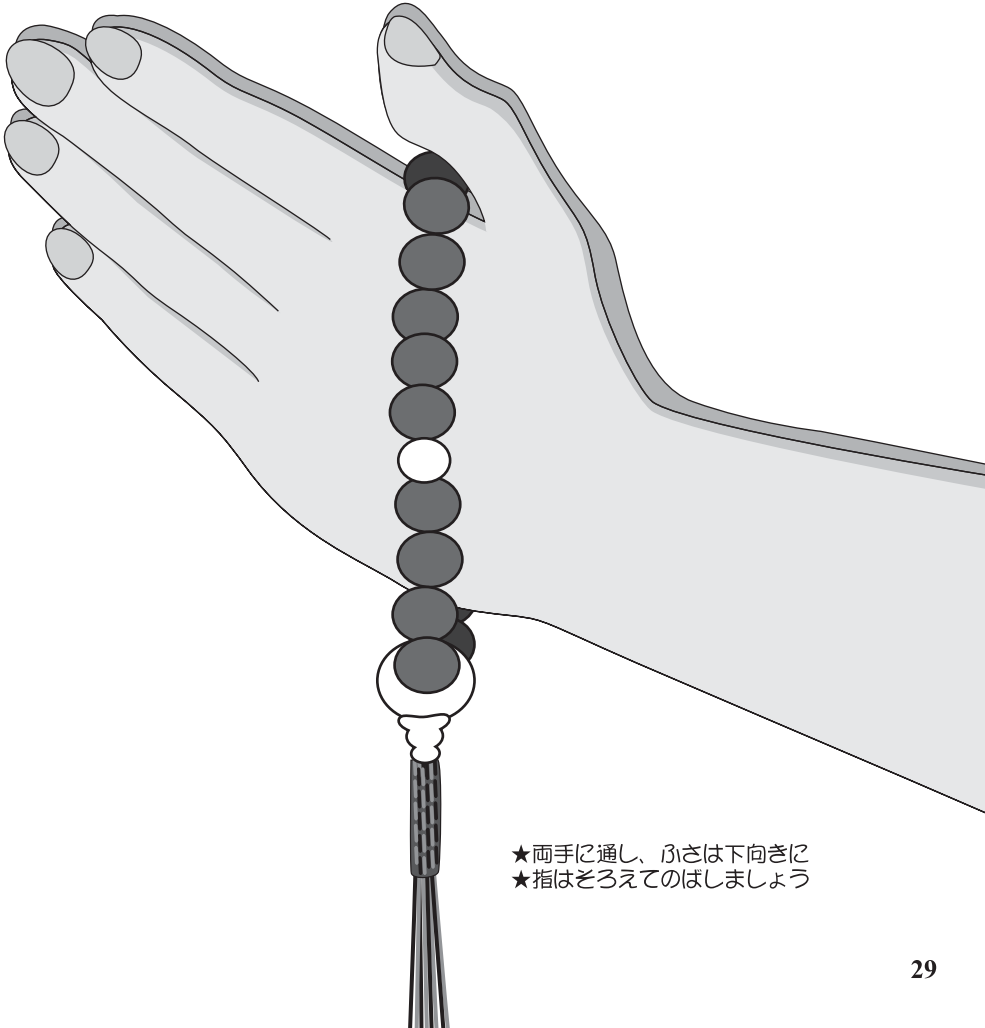
禱や占いまたお守りやお札など、私には何の役にも立たないと気づかされません。良いことも悪いことも、みなご縁と受けとめて、精一杯生き抜くことのできるみ教えです。

したがって、お守りやお札に頼る必要はありませんし、迷信に惑わされることもないのです。そのためにも、日頃からお聴聞をしましょう。阿弥陀如来さまの眞実のみ教えにあうことによつて、力強く生きる道が開かれてくるのです。もらったお守りやお札をどうしてよいか分からないときは、お手次のお寺に相談しましょう。

お念珠は、
大切な法具です。

念珠

ねんじゆ



- ★両手に通し、ぶさは下向きに
- ★指はそろえてのばしましょう

POINT

- 手を合わせるときにはお念珠を
- 大切に扱きましょう

お念珠は仏前に礼拝らいはいするときには欠かさない大切な法具で、一般的には珠数じゆず(数珠)ともいわれています。

形や用い方は宗派によって多少の違いがあります。お念仏の回数を数えたりするために用いることもあるようです。浄土真宗本願寺派では「念珠」といい、阿弥陀如来さまをつつしんで敬い礼拝(合掌・礼拝)するときの法具として用います。親鸞聖人はお念珠を捨てて阿弥陀如来さまを拝めとおっしゃったことはまったくありません。蓮如上人はお念珠を持たないのは、阿弥陀如来さまを手づかみにするようなものですと述べられ、お念珠を持つことをすすめてくださっています。

珠の数は、百八・五十四・三十六・二十七・十八など、色いろで、珠の大きさによっても違いがあるようです。

お念珠の持ち方は、房や紐を下にたらし、腕にかけたりせず(腕輪念珠は別)、

いつも左手に持ちます。合掌のときは、指を閉じてのばし、お念珠を両手にかけて、房や紐を下にたらし親指で軽くおさえます。

お念珠はお経本などと同じように大切に扱い、畳の上や床など、人の歩く所には直接置かないようにし、どうしても置かなければならない時には、下に何か物を敷いて置くようにします。

腕輪念珠は念珠を小さくしたもので、いつでも、どこでも礼拝できるように作られたもので、魔除けや占い用ではなく、あくまで法具として用います。なお、切れたお念珠は仏壇店や念珠店で修理をしてもらえます。

式章



式章は、
阿弥陀如来さまを
敬う心をあらわす。

POINT

● 仏事にはお念珠と式章を

式章は、昔の肩衣かたぎぬの代わりにつくられたもので、仏前にお参りするときの身だしなみとして用います。肩衣は、肩にかける衣の意味で、肩から前に細い布が下がり、後は肩から背中全体を被うような形に作られたものです。真宗の門徒がご仏前に出るとき、最高の敬意をあらわすために普通の衣服の上に着用する伝統的な礼服で、現在でもお寺の報恩講や各種法要の際に用いる所もあります。

式章は、この肩衣に代わるものとして昭和七年（一九三二）に制定されたもので、僧侶が用いる輪袈裟わんげさの下半分に紐をつけたような形になっています。ただし、形は似ていても輪袈裟は正式に得度した僧侶が着用するもので、紋の下に袈裟であることを示す布を縫い合わせたしるしが付けられています。

式章には、一般門徒が用いる門徒式章や仏教婦人会の会員が用いる仏教婦人

会式章、また寺族が用いる寺族式章などがあり、法要・儀式・その他の仏事に際して着用します。ただし、肩衣と式章を同時に着用することはしません。

結婚式などに出席するとき、相手に敬意をあらわす意味からも、その場にふさわしい服装で出席するように、式章を用いるということは阿弥陀如来さまを敬う気持ちをあらわすことなのです。式章がお守りや魔除けの道具でないことはいままでありません。また、お経本やお念珠と同じように大切に扱いたいものです。

式章は法衣店や仏具店でも扱っています（仏教婦人会式章は本願寺出版社）ので、できればお経本やお念珠とともに家族全員が所持し、ご法座や仏事には忘れずに着用したいものです。

日常勤行

にちじょうぎんぎょう

正信偈は
親鸞さまのよろこびのうた。



〇〇
 ・帰命無量寿如来
 同
 南無不可思議光
 法蔵菩薩因位時
 在世自在王佛所
 觀見諸佛淨土因
 國土人天之善惡
 建立無上殊勝願
 超發希有大弘誓



POINT

- 家族そろってお勤めしましょう
- 般若心経はお勤めしません

『正信偈』^{せいしんげ}は親鸞聖人のよろこびの偈（うた）です。お釈迦さまの教えと、そのみ教えを伝えてくださった七高僧さまのおさとしによって聖人ご自身が、阿弥陀如来さまの本願をたたえ、共にみ教えを聞いていこうとすすめてくださっています。そして、蓮如上人によって、親鸞聖人の著されたご和讃とともに浄土真宗の門徒の朝夕の勤行と定められました。

しかし、家族の誰もが忙しくなってきた昨今、そろって『正信偈』をお勤めすることはたいへん難しいことです。しかし、阿弥陀如来さまにお礼をさせていただくことを欠かすことはできません。それでは何をお勤めすればよいでしょうか。『讃仏偈』^{さんぶつげ}、『重誓偈』^{じゅうせいがい}というそれぞれ、仏説無量寿経^{ぶつせむりょうじゆきやう}の中にある短いながらも有り難い偈文^{げもん}をお勤めすることもよいでしょう。また、朝どうしても忙しくしてお勤めできないとき

は如来さまに合掌・礼拝だけして、夕方家族そろって『正信偈』をお勤めするといいでしょう。そのほか、それぞれの意識勤行として『さんだんのうた』^{さんだんのうた}、『讃仏偈』^{さんぶつげ}、『ちかいのうた』^{ちかいのうた}、『重誓偈』^{じゅうせいがい}、『らいはいのうた』^{らいはいのうた}（十二礼）^{じふにらい}などがあります。何より大切なことは、感謝のお勤めをさせていただくことです。

他宗でよく使われる『般若心経』^{はんにゃしんぎやう}（『般若波羅密多心経』）は自力のお経なので、浄土真宗ではお勤めしません。般若心経に説かれているのは、「般若波羅蜜」という真実を見抜く智慧と菩薩の実践行とによって煩惱を断ち切る自力の教えです。そのため、絶対他力の浄土真宗にはそぐわないのです。

ごぶんしょう
御文章

と

ごでんしょう
御伝鈔

御文章は
蓮如上人から私へのメッセージ。

御伝鈔は
親鸞聖人のご生涯を伝えるもの。



POINT

● 拝聴のときは、姿勢を正し、
頭を少し下げます

『御文章』^{ごぶんしょう}は、本願寺第八代宗主蓮如上人が、ご門徒の方に浄土真宗のご安心を間違ひなく心得ていただきたいとの思いから、み教えの要をわかりやすいお手紙のかたちで記されたものです。上人ご在世の当時から、ご門徒に對する『御文章』の拝読はされていたようです。

「のちの代のしるしのためにかきおきし のりのことの葉 かたみともなれ」(二帖目第一通)とありますように、『御文章』は、ただ当時のご門徒だけにかかれたものではなく、現在のこの私をご教化くださる蓮如上人からの大切なお言葉と受けとめ、常日頃から拝読させていただきたいものです。

『御文章』を置く場所は、原則としてお仏壇に向かつて左側におきます。その際、御文章箱の向き(下がり藤になるよう)に注意しましょう。拝聴は、姿勢を正し頭を少し下げます。

『御伝鈔』^{ごでんせう}は宗祖親鸞聖人三十三回忌の翌年に著されたもので、本願寺第三

代宗主覚如上人(聖人の曾孫)による親鸞聖人鑽仰のお詞です。『御伝鈔』と親しまれるのは後のことで、当初は「善信上人親鸞伝絵」と題され、絵と詞が交互する横長の上下二巻からなる巻物でした。しかし、巻物では一度に多くの人びとが見ることはできません。そこで、少しでも絵による親鸞聖人のご生涯と、お念仏のよろこびを多くの人びとに伝えるために工夫が施され、絵と詞が分けられるようになりました。

報恩講に、本堂余間にかけられる四幅の『御絵伝』^{ごえでん}がその絵の部分であり、詞の方は一冊の書籍にして上巻八段、下巻七段からなり、『御伝鈔』と呼ばれるようになりました。親鸞聖人がお生まれになってから九十歳でご往生になり、廟堂(お墓)が建てられ、全国のご門徒がお参りにこられるまでが述べられています。ご本山では一月十三日に拝読されます。

迷信



お念仏は、あなたに
迷信のない生き方を
あたえます。

POINT

● 迷信にこだわってはいけません

葬儀やその後の法事を行なうにあたっては、さまざまな迷信があります。そのいくつかをあげてみましょう。

まず日の吉凶は、中国の唐の時代に起こった占いがその起源だといわれ、日本で大衆化するのは江戸時代末です。日本ではこれを先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口の六つの日時にわけて勝負ことを占いました。なかでも友引というのは、もともと「相打ち共引き」として勝負なしつまり引き分けたという意味であったにもかかわらず、なぜか「友を引く」という意味にすり変わりました。この日に葬式を行なうと身近な方が続いて亡くなるようにいわれています。また、「たびたびあつては困る」と、足袋を履かないのも単なる語呂合わせです。そして、火葬場や野辺送りから帰ると玄關口で塩をふりかけるのが清め塩です。これは神道から起こったもので、

「死者のけがれから身を清め、そのけがれを他に移さない」との思いから、用いるようになったものです。しかしよく考えてみると、亡くなられた方をけがれているとみるのですから、たいへん失礼なことです。もちろん浄土真宗では必要ありません。

また、四十九日の法事が三ヶ月にわたるとよくないといわれる方があります。これも「始終苦が身に付く」という語呂合わせです。

これらの迷信を支えるものとして、死に対しておそれがあるようです。迷信へのこだわりは、新たな迷信へのこだわりを生みます。お念仏によつて生かされる私たちは、「何が起こっても阿弥陀如来さまと一緒に、大丈夫」の心で過ごしたいものです。亡くなられた方はお浄土で仏さまとなって私たちを導いてください。そのため、「草葉の陰」「冥福」などの言葉も用いませぬ。

こぼればなし(2)

仏法者申され候ふ。わかきとき仏法をたしなめと候ふ。としよれば行歩もかなはず、ねぶたくもあるなり、ただわかきときたしなめと候ふ。(『蓮如上人御一代記聞書』)

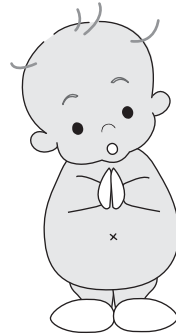
各寺院において、仏法の因縁をつけるべく活動として、さまざまな年令を対象とした教化活動団体があります。

子ども会(日曜学校、土曜学校など)・ボーイスカウト・仏教青年会・若婦人会・仏教婦人会・仏教壮年会などがあります。また趣味などを生かした団体もあります。皆さんも家族そろって該当する会に参加してみたいか、活動内容は異なるので、各寺院に

三つ子の魂百まで

お寺の方にお問い合わせ下さい。

しかし何事も土台が大事であるように、人生の土台である若い時、特に幼い時からの仏縁は大切にしたいものです。そういったことから子ども会(日曜学校・土曜学校)をおすすめします。幼い時にお寺で学ぶお経など、覚えも早く作法も身につけやすく、しかも幼い時の習いは一生ものではないでしょうか。ぜひとも、お子さま・お孫さまをお寺の子ども会におすすめ下さい。

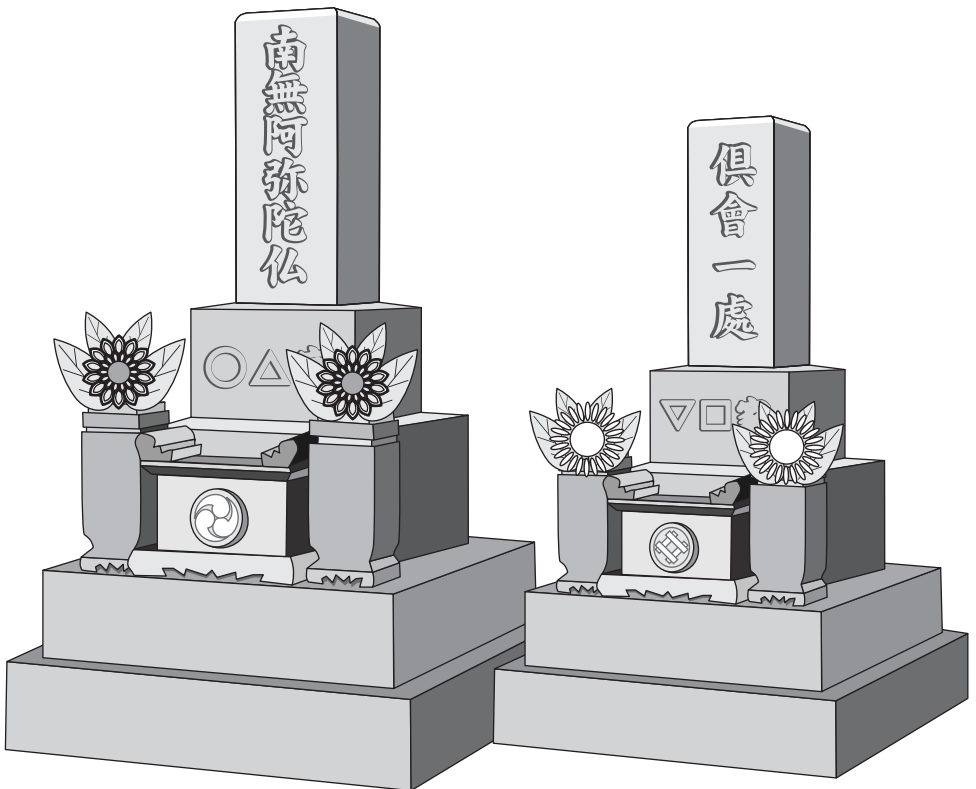


第
3
章

仏
事
篇

お墓は如来さまの
呼びかけに気づく
道しるべ。

お墓



POINT

●墓相や方角に 良し悪しはありません

お彼岸やお盆には全国津々浦々でお墓参りの光景が見られます。ここではお墓について考えてみましょう。

お釈迦さまがお亡くなりになられた（ご入滅）時、そのご遺骨（仏舍利）は、塔を建てて大切に保管されました。ここで人びとは、お釈迦さまのお徳を偲び、仏法に出遇ったのです。この塔を仏舍利塔といい、仏教におけるお墓のありようがうかがわれます。

また、親鸞聖人のお墓に関しては、『御伝鈔』に「文永九年（一二七二）冬のころ、東山の西の麓、鳥辺野の北、大谷の墳墓をあらためて、同じき麓よりなお西、吉水の北の辺に遺骨を掘り渡して仏閣をたて、影像を安ず」と記されています。この仏閣は大谷影堂と呼ばれ、各地からの参詣者が、ここでご在世のご教化を思い浮かべては涙し、教えを受け伝えたいといえます。後に本願寺へと発展していくのです。

このようにお墓とは、お敬いの心から碑を建てて遺骨を大切に保管する場

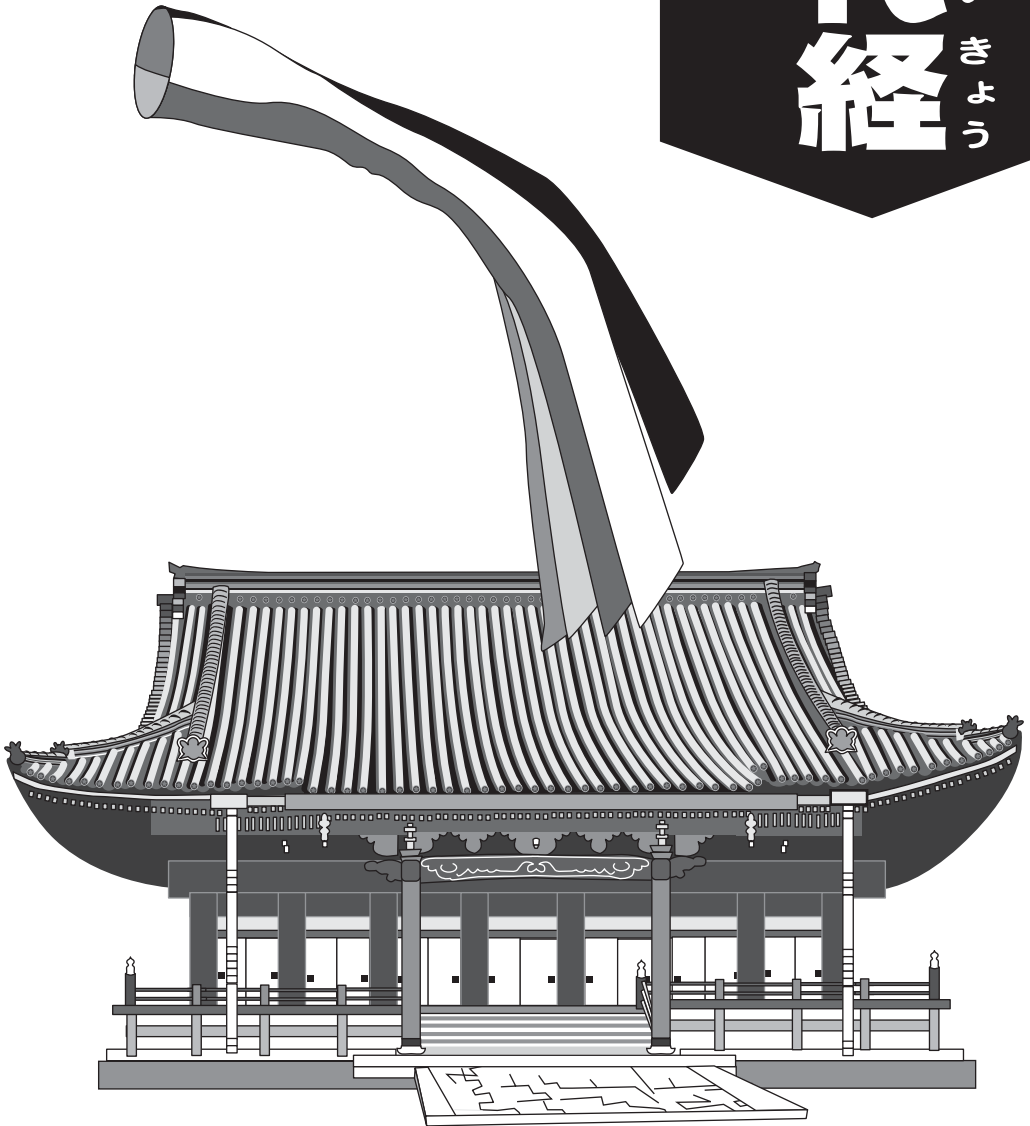
所であり、仏縁をいただく場所です。しかし故人の居場所ではありません。浄土真宗は往生浄土、往生即成仏の教えです。浄土に生まれ阿弥陀如来さまと同体の悟りをいただくのです。さきに浄土に往かれた故人を偲びつつ、「あなたもお浄土へ生まれるのですよ」と呼びかけてくださる如来さまの願いを聞かせていただく場所、それがお墓なのです。

故人や墓石を拜むのではなく、仏縁をいただくという意味からも墓碑正面に刻む文字は、「南無阿弥陀仏」か、「俱会一処」などの仏語・法語がよろしいでしょう。

よく「墓相が悪いと、ご先祖が苦しんだり、祟ったり、悪いことがある」と心配する方や、墓の向きや形、建てる日取り、なかには「閏年に墓を建てたらいけない」という方もいますが、まったくの迷信です。お墓の向きや建て方、日取りなどは、私の生ぎざまとは何ら関係ないからです。仏縁に遇わせていただくお墓で、かえって悩んだり迷ったりするとは悲しいことです。

永代経

えいたいきょう



POINT

● あなたの永代経懇志は
念仏繁盛に役立ちます

現在、お釈迦さまのお説きになられた教えが「経」という形態をもつて残されています。

ところがその中に「仏説永代経」というお経はどこを捜してもありません。現在、仏教の各宗派においては「永代経法要」が勤修されていますが、永代経とは一体どのようなものなのか、また何のために勤められるのか、考えてみましょう。

まず、浄土真宗以外の宗派ではどのように位置付け、またどのようなかたちで勤められるのか、知人であり、先輩でもある二ヶ寺(ここでは浄土宗、曹洞宗)のご住職にたずねてみました。ただし、それぞれのお寺の方針もありますが、共通しておっしゃられたことは「亡き人への永代供養料もしくは回向料であり、彼岸会、盂蘭盆会、開山忌等の法要に併せて勤める」とのことでした。それでは私たち浄土真宗では、どのよ

うに受けとめていいのか、本願寺より出版された『法式規範』より見てみましょう。その解説のなかに、「永代経法要」を次のように示していました。「故人の命日ごとに永代に誦経する法要で、ご本山では毎日勤められている。浄土真宗では、死者の追善供養のために誦経するのではなく、故人の命日を縁にして仏恩報謝のお念仏に励み、聞法の機会を得る法要とする」

この解説より汲み取られる意は、私に仏法に遇えるご縁を、故人が結んでくださったということでしょう。ただしこれだけなら、年回法事でも、彼岸会、盂蘭盆会といった定例法座でも、十分にその役目を果たせます。永代経には、お寺とご門徒が一丸となつて、仏法聴聞の道場であるお寺や、法要儀式等の寺院活動が永代にわたって護持されていくという意義もあり、このことも大切な一面であるうと思えます。

ほうみょう

法名

ききょうしき

帰敬式



法名は仏弟子とな
った人の名前です。

POINT

- 法名は本来、生前にいただくもの
- 今すぐ帰敬式を

法名と戒名について考えてみましょう。どちらも同じものと思われている方もあるようです。

まず戒名は、仏道修行の規律である戒律を守り修行していくことを誓う（受戒）ときにいただくものです。

それに対して法名は、仏教に帰依し、仏法をよりどころとして生きる仏弟子となった人の名前です。浄土真宗のみ教えは、阿弥陀如来さまの本願力によって信心をめぐまれ、念仏を申す人生を歩み、浄土で真の悟りに至るのであります。したがって、きめられた戒律を守る受戒はしませんので、戒名とはいわず法名といえます。

また、法名は亡くなった後にいただくものと思っている方がいますが、仏弟子となった人の名前ですから、本来は生前にいただくものです。僧侶は得度式で、門信徒の方は、帰敬式（おかみそり）を受けることによつて、仏弟子

となったしるしとして、ご門主から授与されます。この法名は、僧侶・門信徒ともに漢字「しん」文字ときめられており、うえに必ず「しん」の字がつきます。この「しん」という字には、お釈迦さまの弟子にさせていただきましたという意味があります。

帰敬式を受けることなく亡くなられた方には、葬儀を勤めるご住職が、ご門主に代わって「おかみそり」を行ない、法名を授与します。仏弟子としてお念仏を申させていただく私たちは、生きている今だからこそ帰敬式を受け、法名をいただきたいものです。

初参式

しよさんしき



人生の出発(たびだち)を仏前で。

POINT

● 門徒はお宮には参りません

私たち人間がこの世に生を受け、初めてご本尊（阿弥陀如来さま）にお礼する儀式を初参式といっています。

今から約二千五百年前、ガンジス川のほとりを通られたお釈迦さまは、一握りの砂を手になれ、「このガンジス川の砂の数と、今私が手にしている砂の数とどちらが多いだろうか」とたずねられました。するとお弟子の方は、「それはもちろんガンジス川の砂が多くあります。お釈迦さまが手にされている砂の数はわずかです」と答えますと、お釈迦さまは、「多くの生き物の中で、人間に生まれさせていただくということは、このようにまれなことである」とおさとしく下さいました。次に一握りの砂を人差し指の上にかけれ、「それでは人差し指の上に残っている砂の数と、今下に落ちていった砂の数とどちらが多いだろうか」とたずねられました。お弟子の方が「それはもちろん下に落ちてい

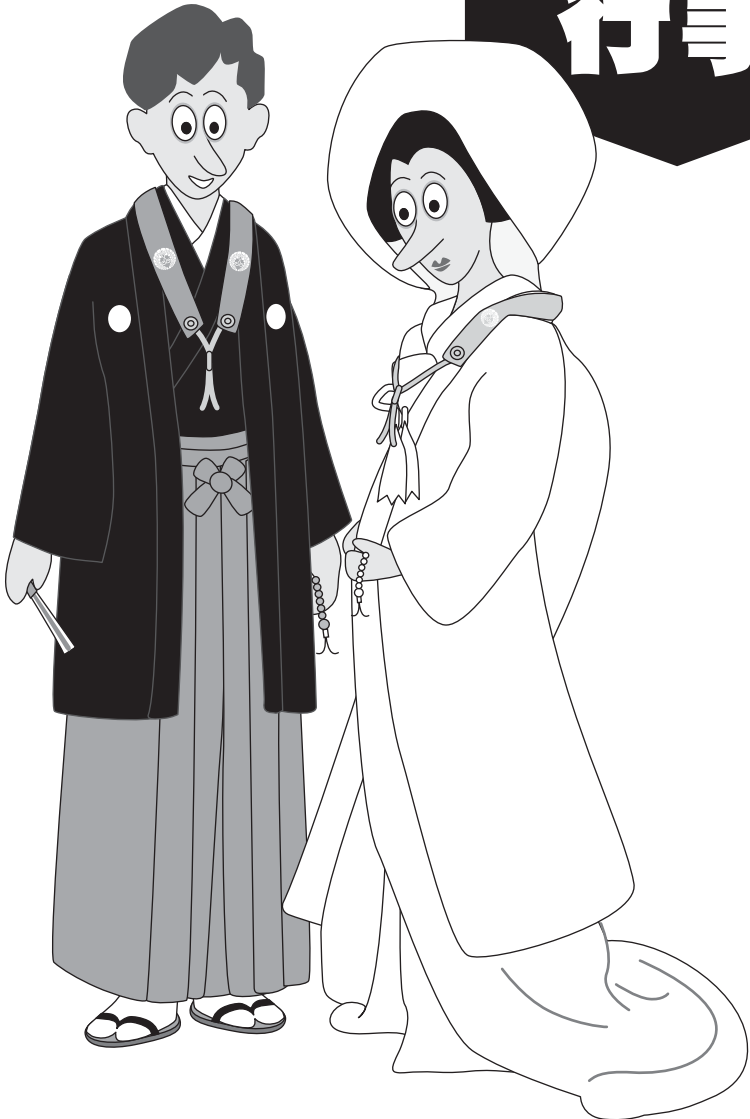
た砂の数が多くあります」と答えますと、「私たち人間が仏法のご縁に遇うことはこのようにまれなことである」とおさとしく下さいました。

初参式とは、このようにはかり知れない因縁をいただいて人間として生命を受けたことをよるこび、遇いがたい仏法のご縁とさせていただく大切な儀式です。親であれば、子どもの成長とよるこびのある人生を願わない人はありません。子どもの人生の出発という、家族にとつての大きな節目にあたり、どんな時でも阿弥陀如来さまの大きなお慈悲の中で生き抜かせていただくことを、みんなでよろこばせていただきたいものです。

初参式を、年中行事として実施しておられるお寺や、仏教婦人会の行事として行なっておられるお寺もあります。すすんでお参りください。

喜びも悲しみも
如来さまとともに

諸々の 行事



POINT

●門徒は人生の節目を
仏事で迎えます

仏事といえば、お葬式や法事など、一般的に死からつながるイメージを抱いておられる方が多いようですが、私たちの宗門では、誕生から死に至るまで、ご本山をはじめ一般のお寺でもいふろんな行事が行なわれています。浄土真宗門徒として、実行してほしいと思えますし、有縁の方がたに広めてほしいと思います。

*入仏式……各ご家庭にご本尊を新しくお迎えした時に、慶事として行なわれる法要が、「入仏慶讃法要」です。また、修理などからおかえりになったときにもお勤めいたします。「たましい」を入れるということではなく、これからもご本尊を中心に、感謝の生活をおくることを決意表明する儀式です。なお、ご本尊は本願寺よりお迎えしましょう。

*入門式……新しく浄土真宗の門徒となる決意を、仏前において表明する儀

式です。

*成人式……二十歳の成人にあたり、人として生まれ育てられた意義を自覚し、仏法をよりどころとして共に生きることを、仏祖の前に表明する儀式。ご本山で、毎年一月に勤められます。

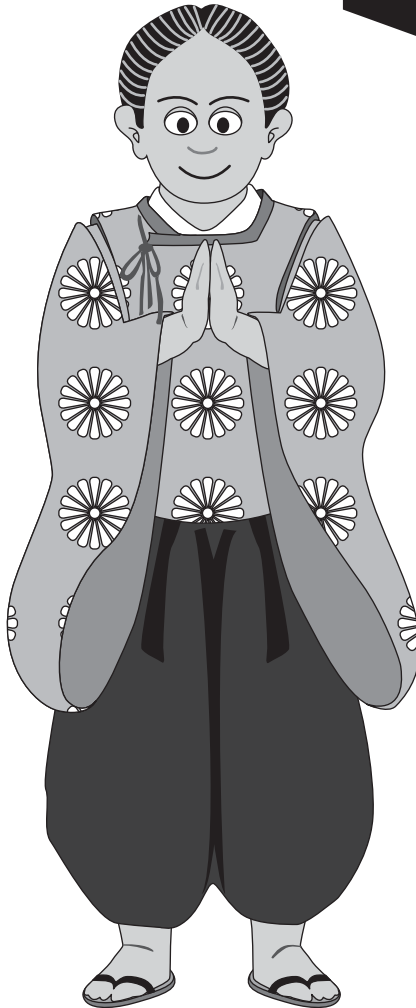
*起工式・上棟式・定礎式……今まで色いろな方がたに助けられ、大地の恵によってこの地に建築できる縁をよるこび、仏恩に感謝するとともに、完遂の決意を新たにする儀式。

*竣工式……新築（修復）の普請が多くなつた方がたのおかげにより完成したことを、仏前に報告し、感謝のよるこびを表明する儀式。

*結婚式……多くの中から一組の男女が結ばれるご縁をよるこび、ご仏前において、念仏薫る生活をおくることを表明する儀式です。

親鸞さま、
おめでとう。

ご
う
た
ん
え
降誕会



POINT

● 5月21日は親鸞さまのお誕生日

五月二十一日は、宗祖親鸞聖人のご誕生にいられた日です。そのご誕生をお祝いするため、宗祖降誕会が全国各地で勤められます。安芸の地では「こたんじょうび」ともいわれ親しまれています。

降誕会には、二つの意味があります。一つは釈尊の誕生をお祝いする行事のことです。もう一つは、各宗を開かれた祖師の誕生をお祝いする行事のことです。釈尊の誕生をお祝いする行事は、毎年四月八日に花まつりを行なっていますから、降誕会は、浄土真宗の宗祖であります親鸞聖人の誕生をお祝いする行事です。

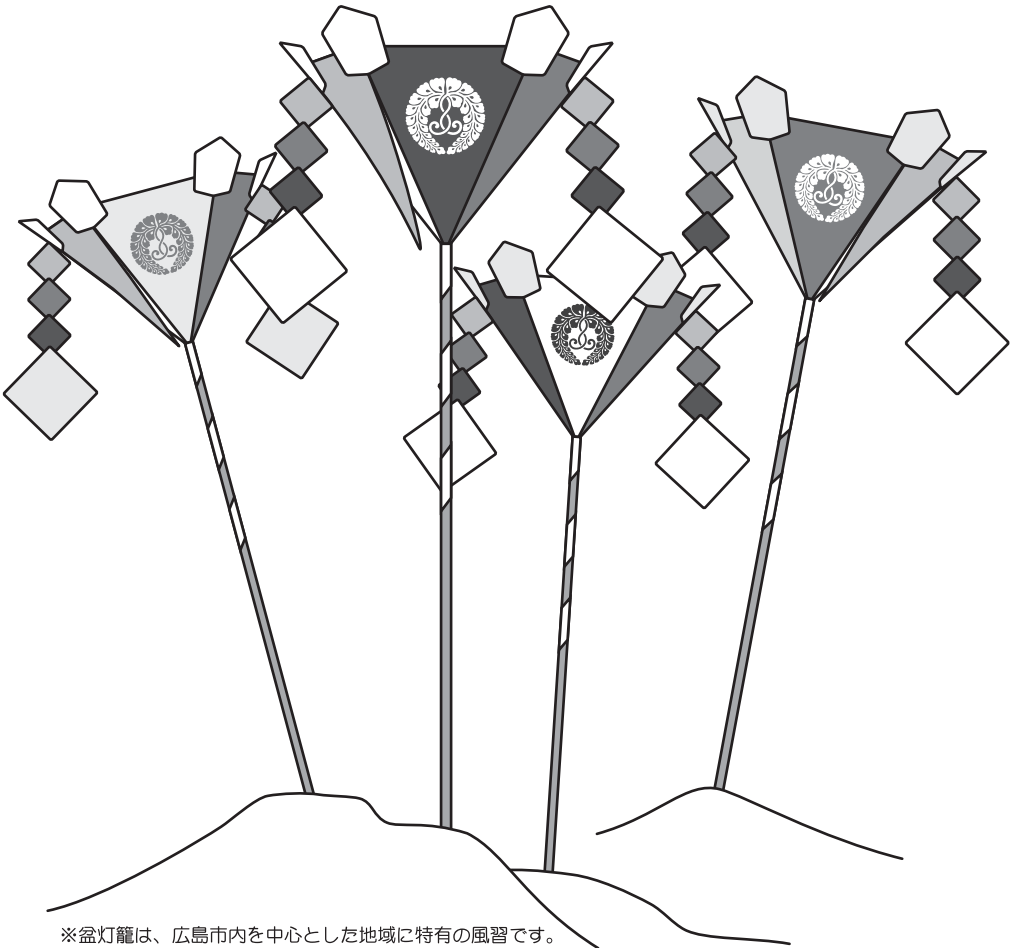
親鸞聖人は、承安三年（一一七三）五月二十一日（旧暦四月一日）に、京都の日野の里でご誕生になりました。降誕会は、明治七年五月二十一日に、第二十一代宗主明如上人によってご本山で営まれ、年ねん盛大になり、一般の

お寺でも行なわれるようになりました。ご本山では毎年この日に宗門関係学校の学生が参拝して音楽法要が勤められます。このほか、全国から雅楽会が参集して雅楽献納会、南能舞台では祝賀能、国宝・飛雲閣では茶席が設けられ、終日祝賀ムードで盛り上がります。

私たちは、親鸞聖人のご誕生がなければ、真実のみ教えに遇うことができなかつたことでしょうか。聖人がお示しになった念仏のみ教えをあやまりなく相続し、ようこそ私たちのためにご誕生くださいましたとよるこび、ますます法味愛樂させていただく行事が、宗祖降誕会です。

お盆は歓喜会
ともいいます。

お盆



※盆灯籠は、広島市内を中心とした地域に特有の風習です。

POINT

● お墓参りを縁に、聴聞する身 にさせていただきます

お盆は正しくは孟蘭盆むらんぼんといわれています。お釈迦さまのおさとしによつて、弟子の目連尊者もくれんが布施行を行ない生母を餓鬼道の苦より救うことができた。孟蘭盆経むらんぼんぎょうに述べられています。その時の踊り上がるほどのよるこびが、現在の盆踊りにつながると思われています。盆灯籠については、安芸の国（広島地方）ならではの風景です。これは、確かな文献からではありませんが、江戸時代の広島城下に、娘を亡くした父親がありました。石灯籠を立てて灯を供えてやりたいと考えましたが、貧しく、竹をそいで紙を貼り灯籠として供えて気休めしました。それが現在のにぎやかな盆灯籠風景を見るようになった由来だといわれます。

お盆を迎えるにつけて念仏申させていただく私たちは、形だけにとらわれず、ことの起こりと内にこもる心もちを大切にたずねたいと思つてのことです。

お盆はとかく施餓鬼せがきとか追善供養ついでんくようにとらわれて、本義が忘れられていることは残念です。親鸞聖人は追善供養を強く否定されました。わが力で励む善でないことを強調されたのです。念仏は私の口で称える私の声であるけれども、阿弥陀如来さまのお喚び声と申されております。

私たち念仏者は阿弥陀如来さまのみ教えを聞き、今救われて浄土への道を生きていることをよるこばせていただきたいものです。そういう意味から、浄土真宗では、お盆を「歡喜会かんぎえ」とも呼びます。

お彼岸



彼岸 = 到彼岸

迷いの世界から悟りの世界へ

POINT

● お彼岸は聞法の日

「お彼岸」という言葉は、日本人の生活の中では、なじみ深い仏教用語のひとつでしょう。お彼岸のお墓参りは、江戸時代になってから一般の人びとに広がりましたが、仏道修行の期間として、平安時代から約千年の長い伝統をもっています。

しかし、仏教の起こったインドや中国では行なわれておらず、日本の風土や気候が生みだした日本独自の仏教行事のようです。

「彼岸」は、もともとは、迷いや苦しみの現実世界をさす「此岸」に対する言葉であり、理想である悟りの世界を意味しています。「お彼岸」とか「彼岸会」という場合の「彼岸」は、「彼岸」の略であり、迷いの世界から悟りの世界へ至るといった意味です。

浄土真宗では、悟りに至るための修行として念仏を申すのではなく、日々の生活の中でのお念仏の味わいこそが

重要です。そして、このお彼岸の行事を、悟りの世界（お浄土）へ至らしめてくださる阿弥陀如来さまのお徳を讃え、そのおこころを聴聞させていただく仏縁として大切にしています。

お念仏のみ教えに生かされている私たちは、常に聴聞に励みたいものです。暑い夏や寒い冬の厳しい季節を越えてほっとひと息ついたときに、自分の心のありようを静かに思う日を設けたのは、日本人の深い知恵だと思えます。お彼岸を単なるお墓参りの日にとどめず、お念仏のみ教えを通して自分を振り返る日としたいものです。

報恩講

ほうおんこう



親鸞さま
ありがとう。

POINT

- 1月16日は親鸞さまのご命日
- 家庭ではおとりこしを勤めましょう

報恩講は、宗祖親鸞聖人のご命日である一月十六日（旧暦十一月二十八日）をご縁として、阿弥陀如来さまのご恩と親鸞聖人のご恩を偲び、感謝させていただく、真宗門徒にとつては最も大切な行事です。本願寺では、毎年一月九日（速夜）より十六日（日中）まで、七昼夜の法要が勤められます。この法要を「御正忌報恩講」（おたんや）といいます。

別院をはじめ一般のお寺やご門徒の家庭では、本願寺の御正忌報恩講に参詣するなどの都合で、日時を早めて営む慣例がありますので、報恩講のことを「おとりこし」ともいいます。この報恩講の名称は、本願寺第三代宗主覚如上人が永仁二年（一一九四）の親鸞聖人三十三回忌法要のあり、聖人の遺徳を讃嘆するご文を「報恩講式」と名づけられたことに始まります。そして、第八代宗主蓮如上人がご文章のなかで、た

びたび報恩講の名をあげられたことで、いつそう広がり、真宗門徒に定着しました。

真宗門徒にとつて最も大切な行事でありますので、各家庭でもお寺さんと日程を合わせ、できれば家族そろって報恩講をお勤めしましょう。その際のお仏壇は、平素とは違い、特別なお飾りをします。

まず、お仏壇の掃除をしましょう。これは、荘厳で最も大切なことです。仏具は、常にきれいにしておくよう心がけたいものです。特に真ちゅう製の仏具は必ずお磨きをします。そして、上卓と前卓には打敷をかけます。季節の花をお供えし、お供物は、餅、菓子、果物を一対づつお供えします。報恩講の主旨にかなうよう丁寧に荘厳することが大切です。

じょ や え

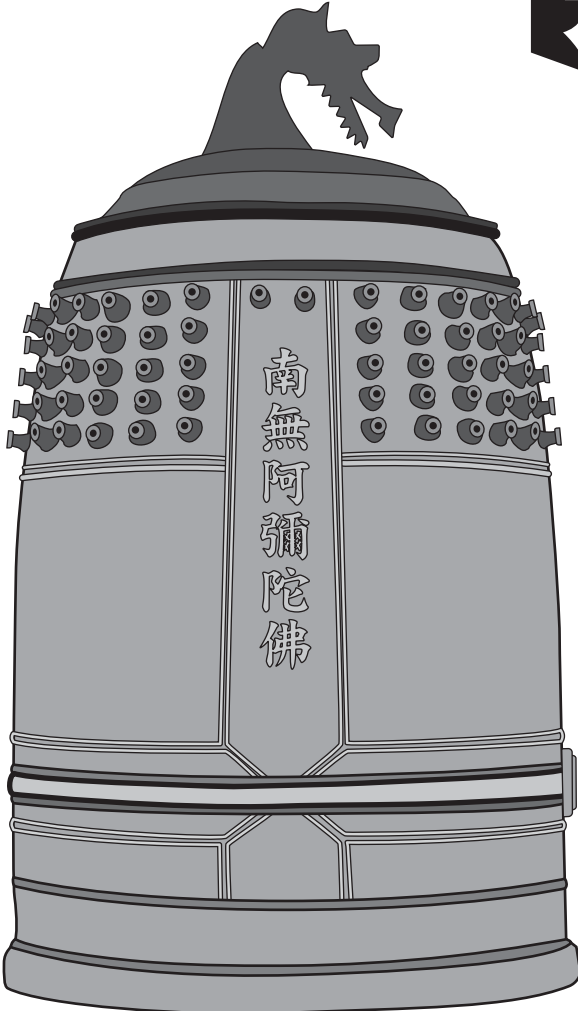
除夜会



が ん た ん え

元旦会

お念仏で年越し
お念仏で迎春。



POINT

● 年末年始にはお寺にお参りしましょう

過ぎた一年を振り返って感謝の気持ちであらわず、大晦日に勤める法要を、除夜会といえます。この夜午前零時前から除夜の鐘をつくお寺が多いようです。

また、元旦を祝うと同時に、今年もお念仏とともに日々をおくらせていただく誓いを新たにする法要を元旦会・本願寺では修正会といえます。元旦の早朝に勤まり、二日、または三日まで勤めるお寺もあります。

「一年の計は元旦にあり」と申しませんが、浄土真宗の門徒にとって元旦は、真実に生かされる身のしあわせをよるこび、この一年をお念仏もるともにおくる決意を新たにする日です。決して、一年の安全を祈ったり、幸運がやってくることを祈願する日ではありません。地方によって違いはあるようですが、年末に仏間を清掃し、お仏壇を荘厳して迎春準備をします。打敷をかけ、お餅

を供えます。お仏壇の花は松がよいでしょう。

大晦日には家族全員でお夕事を勤め、元旦には朝真つ先にお仏壇にお灯明をあげ、お香をたき、お参りの後で新年の挨拶をします。お雑煮をいただくのはそれからです。

このような年末年始の厳肅な行事を通して、自分自身の姿を振り返り、阿彌陀如来さまのお救いの中で今年も歩ませていただくことに感謝したいものです。家族そろって、年末年始の仏教行事をお勤めし、お寺にお参りしましょう。

仏教徒の旗じるし。

仏旗

ろっこんじきき
(六金色旗)



POINT

●大事な仏事には仏旗を掲げましょう

「先日の蓮如上人五百回遠忌法要にお参りさせていただいたとき、たくさん旗が私たちを迎えてくれましたが、あの旗について教えていただけませんかでしょうか」と問われました。

右の図は仏旗、または六金色旗ともいい、仏教を信仰する「旗じるし」で、仏さまの旗です。色は青・黄・赤・白・淡紅の五つの色と、五つの色が混ざってできる色（五種混色）の六色でできています。現在使われている仏旗には、緑・黄・赤・白・紫とその混色のもの（＝右のイラスト参照）。青・黄・赤・白・オレンジとその混色のものがあります。

仏教発祥の地、インドでは、古くから六金色として、六種の色が伝えられています。それは『涅槃経』の中に二月十五日、お釈迦さまが入滅されるとき、お顔から色いろの美しい光を放つ、その青・黄・赤・白・はり・めのう

等の光は、十方を照らし、この光を受けたものは罪苦煩惱の一切を消除す」とあります。「めのう」の色は淡紅であり、「はり」は水玉ともいわれ他の五色を映し出すところから五種混色の色であります。

この旗の創案者は、米国の陸軍大佐オルコット氏で、かつてインド・セイロン島に渡航し、仏教信者となり『涅槃経』に基づいて創案されました。明治二十二年（一八八九）に来日された時に紹介されて以来、仏教各宗派に用いられるようになりました。

仏旗を掲げるといことは、仏教徒としての自覚を表示することであり、広く十方世界をあまねく照らしとつてくださる仏さまのお慈悲をあらわしているものです。大切な仏事には、仏旗を掲げて仏さまを敬う気持ちを示したものです。

念仏の声を 世界に
子や孫に。

まとめ



POINT

● 子が家を離れる時には、
必ずご本尊を

子どもや孫たちにお念仏を伝えるのは後ろ姿です。

おじいちゃん、おばあちゃんがお仏壇の前に座り、お念珠をかけ、手を合わせて、「ナマンダブツ、ナマンダブツ」とお参りしているすがた、後ろから見ている子や孫たちは何か尊いものを感じています。よろこび悲しみの日常生活そのものが、ご本尊を中心としてお念仏に薫る日暮らしであれば、自然に手が合わせられます。

蓮如上人五百回遠忌法要で、ご門主は、私たちに具体的なお願いをされました。「門信徒の方々のお住まいにご本尊をお迎えしていただきたいということ。当たり前とお感じになるかもしれませんが、故郷を離れた方、ひとり住まいの学生の方にもご本尊を安置していただきたいのです。すべての方に、ご本尊の前で、いのちのあり方を顧み、その大切さを受けとめていただきたいのです。かたち無しに、現代の子や孫にお念仏

を伝えることは簡単ではありません」

このおこころを体し、本願寺では新ご本尊が制定されました。新ご本尊の名称は「いちよう」と「きく」の二種類です。大きい方の「いちよう」は幅十九センチ、奥行き九センチ、高さ二十四センチ。小さい方の「きく」は幅十・三センチ、奥行き二・九センチ、高さ十七・二センチです。絵像と六字尊号の二種類があります。在家免物冥加額は「いちよう」が三万円、「きく」が二万円です。

現在の住環境にあわせ簡単に安置できるよう配慮された新様式のもので、平成十二年八月一日から授与がはじまりました。

考えてみますと、かたち無しに伝えていくことはたいへん難しいことです。私たちは、頭と口だけで伝えようとしてきたのではないのでしょうか。私は浄土真宗の門徒という自覚のもとに、お莊嚴・作法をおろそかにせず、阿弥陀如来さまへの感謝の心をはぐくみ、お念仏のみ教えを伝えていきたいと思います。

こぼればなし(3)

「あなたのご宗旨は？」と問われたらどう答えますか。「仏教です」「真宗だと思います」「寺さんの門徒です」などと答えられるのではないのでしょうか。

正式にいいますと私たちの教団は「浄土真宗本願寺派」です。浄土真宗を開かれた方は親鸞聖人です。「宗祖」「ご開山」と敬い尊ばれています。中心となるお寺、本山は京都にある本願寺(西本願寺)です。本願寺の住職であり、親鸞聖人から代だい教えのともしびを受け継がれている方を「ご門主さま」といいます。現在は、24代大谷光真門主(即如上人)です。全国に本願寺派のお寺は1万334あります。

他の伝統仏教教団では、お寺に所属する信者を「檀家」ということが多いようですが、浄土真宗本願寺派では「門徒」といいます。門徒が所属するお寺は、数ヶ寺から数十ヶ寺が集まり「組」という地域組織を作っています。さらに組が集まって「教区」が構成されています。(全国に組は533、教区は31、開教地は1)

広島県はお寺の数が多いので、県を東と西に分け東側を備後教区、西側を安芸教区といいます。安芸教区には25組、556のお寺があります。安芸教区の事務所を教務所といいます。ご門主が住職である広島別院に教務所があります。読者のみなさんはどこの教区のどこの組のなんというお寺のご門徒なのでしょう。

安芸教区の人びとは、昔から信仰の篤い人が多く「安芸門徒」と呼ばれて、知られています。独特の習慣も受け継がれています。お盆には、お墓に竹と紙で作った灯籠をお供えすること。親鸞聖人のご命日が1月16日であることから、毎月16日には、肉や魚を食べない「精進」という習慣などがあります。かつては魚市場も休みになり「おたんやの市どまり」といわれていました。生命の尊さ大切さを実感するからこそすばらしい伝統です。



《
付

録
》

電報について

弔電の例

様のご逝去の報に接し、衷心よりお悔やみ
申し上げます。

様のご逝去、衷心哀悼の極みに存じます。

ご遺族のみなさまのご愁嘆いかばかりかと拝
察申し上げます。今生におけるご活躍を偲びつ
つお念仏申させていただいております。

急なことでおどろいております。このような厳し
い現実にお申し上げる言葉もございません。さぞ
かしお力おとしいでございます。今はただお
念仏申し上げるばかりです。

祝電の例（結婚）

様のご結婚を心よりお祝い申し上げます
とともに、今後益々のご多幸を念じ上げます。

様のご結婚を心よりお祝い申し上げます。

お二人にはお念仏に薰るあたたいご家庭を
築かれ、今後益々のご活躍を念じ上げます。

くん、さん、おめでとつ。二人で力を
合わせ、手を合わせ、お念仏に薰る明るいご家
庭をお築きください。

電報で使う呼称

父 御尊父様の 母 御母堂様の 息子 御子

息（御令息）様の 娘 御令嬢様の 祖父（母）

御祖父（母）様の 奥様の ご令室様の 親

しい友人の場合は くん（さん）といった
敬称を使います。

その方との間柄もありますので、サンプルは
あくまで参考にして気持ちを表わすことばを添
えられることをお勧めします。また、弔電や弔
辞などでよく使われる用語で、浄土真宗として
ふさわしくない言葉もあります。ほとんど決ま
り文句になっているようですが、み教えを聞く
と、浄土真宗の門徒として使うべきでないこと
がわかっていただけだと思います。違いを考え
てみてください。

ふさわしくない言葉↓真宗で使うことば

天国 お浄土

幽冥境を異にする み仏の国に生まれる

草葉の陰で お浄土より

永眠する 往生する

安らかに眠り下さい 私たちをお導き下さい

ご冥福をお祈りします 哀悼の意を表します

戒名 法名（院号法名）

弔辞について（例文）

このたび 様ご逝去の報に接し 誠に

哀悼の極みに存じます

葬儀にあたり ご遺族をはじめ有縁の皆さまのお歎きかばかりかと謹んでお悔やみ申し上げます

様（さん） あなたは（会社・各種団体などでの個人の功績や印象深いエピソードなどをまじえながら……）など多大な貢献をされた（尽力されました） またその 姿勢は私たちの手本でもありました 私たち（会社・各種団体など）一同は あなたの遺志を受けつぎ（会社・各種団体など）の益々の発展のために微力ながら尽力させていただきます

またご遺族の皆さまと共に この悲しみを
ご縁として あなたが身をもって示してください
た人生無常の理にめざめ いやいよ聴聞に励み
お浄土に往生する人生をおくらせていただく
ことをご仏前にお誓いして弔辞とさせていただきます
きます

どうか み仏として私たちを見守りお導きく
ださい

年 月 日

（会社・各種団体など）

（役職名など）

おわりに

安芸教区教区報『見真』に平成九年(一九九七)四月号から平成十一年(一九九九)三月号まで掲載された「仏事作法あれこれ」をもとに、安芸教区基幹運動推進委員会の勤式推進部会と広報部会が中心に編集を行ない、ようやく完成の日を迎えました。

それぞれのテーマごとに「まとめ」と「ポイント」を掲げ、イラストを織り交ぜて、基本的なことをできるだけ分かりやすいようにとつとめました。また読者の皆さまの身近で、仏事に關する疑問があれば、そのテーマのページを複写して使っていただけでも配慮しました。

各種研修会などでも幅広くご利用いただき、お寺との仏事に関する相談・話し合いのきっかけ、橋渡しになればと願っております。

刊行にいたるまでには、多方面からのご協力、ご支援をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。また、ご意見・感想などがございましたら、次版続編の参考にさせていただきますと思いますので、どしどしお寄せ下さい。

平成十二年(二〇〇〇)六月

編集者一同

合 掌

発刊に寄せて

安芸教区基幹運動推進委員会会長

田 中 賢 誠

今、日本社会の状態を考えますと、「家族の崩壊」ということが大きな問題の一つです。こころの安らぎがない社会ともいわれます。

ご門主さまは「蓮如上人五百回遠忌法要御満座の消息」の中で、私たちの出来る具体的な行動の一つに「ご本尊阿彌陀如来を中心にした家族生活の形をととのえること」とお示し下さいました。

お仏壇(ご本尊)をお迎えしていない方に、「なぜ仏壇を安置しないのですか」と聞いたところ、「亡くなった者もいないのに……なぜそんなことを」とおっしゃられました。仏事を「死後の問題」として扱う、誤った認識の大変多いことが残念でなりません。正しい認識の下、毎朝お仏飯を供えご仏前に手を合わせる生活の基本を、もつともつと身近に感じて頂きたいものです。こころに潤いと安らぎに満ちた生活の展開がみられるはずで。

このたび、安芸教区基幹運動推進委員会の勤式部会と広報部会の先生方の献身的な執筆・編集校正作業のもと、またお仏壇の写真撮影にはご本山の式務部にもご指導を頂き、ほか各方面からの力強いご尽力を賜りながらこの「仏事あれこれ小百科」を発行することが出来ましたこと、誠に有難いことです。

一人でも多くの方にお読みいただき、仏事を身近に感じていただきたいと念願しております。

平成十二年(二〇〇〇)六月

合 掌

《参考図書一覽》

- ・ 仏教事物由来伝説の研究 顕道書院
- ・ 仏事の話 永田文昌堂
- ・ 浄土真宗のしきたりとおしえ 開山堂出版
- ・ 岩波仏教辞典 岩波書店
- ・ わが家の宗教を知るシリーズ 浄土真宗本願寺派のお経 双葉社
- ・ 現代の葬儀とお墓 太陽出版
- ・ 仏事の小箱 津村院御堂さん編集部
- ・ 法事を営む70章 大阪教区
- ・ 続法事を営む70章 大阪教区
- ・ ポケットブック 探究社
- ・ 願いを生きたる浄土真宗の法事 探究社
- ・ 御伝鈔で味わう宗祖のお念仏 探究社
- ・ 浄土真宗のお仏壇 探究社
- ・ 暮らしの中の門徒手帳 探究社
- ・ お寺なぜなぜ事典 大法輪閣
- ・ 浄土真宗のおつとめと心得 池田書店
- ・ 広島の冠婚葬祭 中国新聞社
- ・ 必携真宗事物の解説 東方出版
- ・ あなたは死後どこへ 備後教区
- ・ 真宗門徒の仏事作法1 お内仏のお給仕 法蔵館
- ・ 浄土真宗の仏事 世界文化社
- ・ 西原芳俊 経谷芳隆
- ・ 門徒ものしり帳(上、下) 法蔵館
- ・ 浄土真宗聖典註釈版 本願寺出版社
- ・ 浄土真宗聖典浄土三部経(現代語版) 本願寺出版社
- ・ 浄土真宗聖典 歎異抄(現代語版) 本願寺出版社
- ・ 浄土真宗のこころで 本願寺出版社
- ・ 葬儀規範勤式集 本願寺出版社
- ・ 日常勤行聖典 本願寺出版社
- ・ 法式規範 本願寺出版社
- ・ 浄土真宗必携 本願寺出版社
- ・ ささえあう仲間 本願寺出版社
- ・ スカウトハンドブック 本願寺出版社
- ・ マンガ仏事入門 本願寺出版社
- ・ 仏事のイロハ 本願寺出版社
- ・ 仏事的心得 本願寺出版社
- ・ 暮らしの中の浄土真宗 本願寺出版社
- ・ 考信録 本願寺出版社
- ・ 野々村智劍
- ・ 末本弘然
- ・ 岡崎諒観
- ・ 玄 智

作・岡橋 徹栄
画・広中 建次
末本弘然
岡崎諒観
仏教婦人会編

発行日 平成12年(2000)6月1日
平成13年(2002)6月25日 第9刷
編集 安芸教区基幹運動推進委員会
デザイン・イラスト / 登世岡浩雄
発行 安芸教区基幹運動推進委員会
会長 中山 知見
広島市中区寺町1 - 19
本願寺広島別院内
TEL 082 - 231 - 0302
FAX 082 - 292 - 1186
印刷所 島田印刷

